

書評

青木 紀著『ケア専門職養成教育の研究
——看護・介護・保育・福祉 分断から連携へ』
(明石書店 2017年3月)を読む

佐藤 順子

はじめに

筆者青木紀氏は、名寄市立大学学長就任前まで「貧困・不平等あるいは社会的公正とはなにかといったことに関心を持って研究を進めていた」(p.4)と自ら述べるように、近年の社会福祉学において主要なテーマとして扱われて来なかった「貧困問題」を正面に据え直した研究者である。

本書は、「ケア・ケアリングは民主主義の実践課題であり民主主義を育てる政治的課題である」にもかかわらず、「(専門職)養成教育はケア論の一環としてまともには取り扱われていない」(p.32) ことに対する危機感から、「(ケアに) 関連する専門職養成校教員が連携して取り組まなければならない課題を明らかにすることに貢献できれば、という思い」(p.5) から上梓された労作である。

本書では、ケア専門職として看護師、社会福祉士、介護福祉士、保育士が取り上げられ、それぞれの養成課程、カリキュラム、専門性の基盤、社会的評価そして連携教育のあり方が膨大な資料をもとに俯瞰されている。

なかでも、序章に述べられている養成プロセスは「専門職によるケアあるいはケアリングという行為は、関連する諸法律によって国家の強いコントロールの下に置かれている」ことが、「実践上の連携を複雑にし、『ケアの壁』となっている」こと、そして、「『計画的に』養成されているはずのケア関連専門職だが、看護、介護職、あるいは保育職など、ケア行為をもっとも直接的に体現している職種を中心に『不足』『潜在化』が社会問題となり、未だ解消されないままとなっている」(p.17) と指摘している。

本書の構成と各章のポイント

本書は、序章、6つの章及びあとがきから構成されており、それぞれの章について要約はしきれないが、ポイントを絞って見ていくと以下の通りである。

第1章「専門職養成基盤の形成——ケアの産業化」では、ケアセクターが形成される過程において、ケアという行為が個人的な領域から社会的な領域に重なりながらも移行して行くことによって、ケア専門職が量的に増加し、ケアが一つの産業となり、そのことを支えるために養

成施設・学校が増加して行った歴史的過程を描写している。

第2章「専門職ルートの多様性——階層性と『規制』」では、ケア専門職が「資格誕生後も専門職としての社会的評価も必ずしも高いものにならないまま事態が推移していくこと」が「専門職の養成・確保にネックとなり、『量的確保』の優先性が養成ルートの多様性」を生んでいる」(p.64)と指摘している。

第3章「専門職養成教育のコントロール——教育の分化の困難と対置できない理想」では、看護師、社会福祉士、介護福祉士、保育士のそれぞれの養成教育について基礎的カリキュラムを概観している。その結果、これらのケア専門職が共通の基盤を持っていること、そして「現場における実践的要請」(p.144)に基づいて職種間で連携、協同をはかることが基礎的カリキュラムで共通するキーワードとなっているとしている。

第4章「専門職の専門性基盤と職能団体・学会——ケアのアイデンティティをめぐる分断の構造」では、看護師、社会福祉士、介護福祉士、保育士のそれぞれの専門性と職の中核をなす「ケア」との距離を概観している。筆者は、これらの専門職間の業務範囲や内容がオーバーラップしているにも関わらず、現実的には、「自ら関連職種を『ジェネラル』なもので固めあるいは括りつつ、他方で縦（キャリアパスの整備）や横（領域拡大）へと『スペシフィック』を売り物として膨張」(p.221)している現状があると批判的ともいえる見方で捉えている。

第5章「専門職の社会的評価の現状と対応——分断の中の資格階層化傾向」では、看護師、介護福祉士、保育士の潜在化問題について1節を割いている。これらのケア専門職の実態調査等のデータをもとに、筆者は、行政による離職防止と再就職支援の動きがあるとしつつも、「『女性のライフイベント』の前に就業継続が阻止されている」(p.289)ことをその原因と捉えている。

終章である第6章「専門職養成における連携教育の現状——『ケアの见えない壁』をどこまで意識しているか」では、ケア専門職間に見られる連携の実際、連携教育そして連携教育の先にあるものについて考察を加えている。筆者は、「支援を必要とする人びとのケアにかかわる諸課題の多くはたいてい複合的な要素から成り立っており、それゆえ多職種連携が求められる」(p.289)とし、教育実践としての連携教育の必要性を強調している。一方で、現場レベルではすでに多職種連携が行われているものの、連携教育に関する研究にはあまり進展がないこと、また、特に、「連携教育に距離を取ってきた社会福祉のサイドの態度」こそが、貧困問題への認識をはじめとする「『生活問題』把握の視点の弱さ」(p.316)に起因するものとして分析している。

本書が投げかける論点

本書が示唆する論点は多くあるが、なかでも養成教育のあり方について考えていきたい。まず、筆者が専門職養成校教員に投げかける問題として、「社会福祉学教育と社会福祉士教育と

社会福祉教育、及びソーシャルワーク教育とソーシャルワーカー教育…そのどこに焦点をどこに合わせてカリキュラムが組まれ、展開されているのか」（pp.149-150）という問題提起である。この点は、1987年の介護福祉士及び社会福祉士法成立以降も明確に整理されずに続いている養成教育上の課題である。その背景として、本書第2章で示されているように「社会福祉士養成校の多様な成り立ちと姿」が議論をおこなう共通の土壌づくりを難しくしているのではないか。しかし、整理されていないからこそ、それぞれの養成校が養成教育上の特徴をどこに見出だすかを自律的に検討することが可能であろう。

そして、2点目として、特に介護福祉士、保育士に見られるようなケア専門職の潜在化の問題である。筆者が指摘するように、これらのケア専門職に就く人は女性の比率が圧倒的に多く、「きわめて強くジェンダー化された職業」（p.269）である。

実際に、厚生労働省雇用均等・児童家庭局「平成28年版 働く女性の実情」によると、平成28年3月に大学を卒業した者のうち、産業別の女性の産業別の就職者をみると「医療、福祉」が19.5%と最も多い。さらに、女性雇用者総数に占める割合も「医療、福祉」が最も多い23.5%を占める。

一方で、比較する年代は異なるが、筆者が引用している東京都福祉保健局（平成26・2014年3月）「東京都保育士実態調査結果（報告）」のうち「保育士を辞めた理由」によると、「結婚・出産」25.7%、「結婚」20.4%、「子育て・家事」12.1%といった女性の就労継続阻止要因以外にも労働環境を原因とした明確な離職理由がある。それは、「労働時間が長い」17.5%、「健康上の理由」15.7%（p.267）などのケア専門職が働く環境や条件に起因する問題の存在である。

保育士に対して、最近では「不足」を背景に若干の給与面での改善の動きは見られ、また、個々の施設で職員の定着に向けた努力はあるものの、全般的に労働環境の改善が大きく図られている状況と言えるだろうか。また、上記の退職理由は保育士にとってキャリアパスの整備が潜在化の解消に有効とは言えないことを示している。

女性の就労継続には特に欠かせない勤務時間の見直しや体力的な負担を軽減するような取り組みなど、ケア専門職の働く環境や条件を改善することによって、離職者の増加を防ぐこともまた可能であるだろう。そのためには、「ジェンダー化された職業」としてのケア専門職を女性労働あるいは女性労働者の視点から捉え直す視点が必要となるのでないだろうか。このように考えると、ケア専門職養成教育の中味にはケア専門職自らが職場あるいは社会に対して働きかけていく力を醸成することも必須とされて来よう。

本書で取り上げられた看護師、保育士、介護福祉士、社会福祉士などを含めて、複数のケア専門職の養成課程を持つ養成校は少なくない。ともすればそれぞれの資格に対応した教育となりがちな養成教育を「ケア」という横軸で捉え直す問題提起の著として、本書の投げかける視点は鋭い。

青木 紀著『ケア専門職養成教育の研究——看護・介護・保育・福祉 分断から連携へ』(明石書店 2017年3月)を読む

厚生労働省雇用均等・児童家庭局「平成28年版 働く女性の実情」<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koy-oukintou/josei-jitsujo/dl/16b.pdf> 平成30年2月9日 閲覧.

(さとう じゅんこ 福祉教育開発センター)